学　友　会　会報

第10号

発行　中日本自動車短期大学学友会事務局
〒505 岐阜県加茂郡坂祝町深萱1301 ☎〈0574〉26―7121

1969年　開学当時

1991年　現　在

会報発刊10周年

会報発刊にあたって

中日本自動車短期大学
学友会会長
丹地章夫

本年も会報発刊の時期となりました。

会員の皆様方には、増々御健勝で御活躍のこととお慶こび申し上げます。私、この度、本田前会長の後を受けて、新しく会長に就任致しました。今後は微力ながら、学友会発展の為に尽力致したいと、決意を新たにしております。

今後共、前会長に変らぬ御協力御鞭撻を賜わります様、宜敷くお願い申し上げます。

さて、平成三年度の事業計画も順調に実施されております。

母校に於ては、教育施設も拡大、充実され、本年度の入学募集に際しては、開学以来最高の一六六〇余名という応募者となりました。これはひとえに、母校がこれまで推進してこられた、教育内容の充実、環境整備、教育の国際化等、加えて人間性のある「心」を持った、バランスのとれた技術者の育成が、成果をあげつつあるものと意を強くしております。

前会長の言葉にもあった様に、ここ当面の、学友会の重要事業は、支部の充実です。今年度は是非共支部設立がかけ声だけでなく現実のものとなる様、組織を挙げて後押しして行きたいと思っていますので、関係諸兄の尚一層の奮起、御協力を宜敷くお願い致します。加えて、学友会館建設という大事業も控えております。役員一同気分を引き締めて取り組んで行く覚悟です。

学友会の最大の目標は、

一、母校の発展に寄与すること。

一、会員相互の親睦をはかること

であります。この事を今一度肝に銘じ、その目標に一歩一歩近づく様、努力して行きたいと思います。

最後になりましたが、今回の会報発刊にあたり、多大なる御協力御援助を賜わりました大学関係及びOB諸兄、特に学内在籍のOB諸兄に対して、心より厚く御礼申し上げます。

学長の挨拶

中日本自動車短期大学
学　長
宮岡達志

学友会（卒業生）の諸君、お元気ですか。私は本年の三月、諸君の母校、中日本自動車短期大学の学長に就任しました。諸君は本学に在学中、私の哲学か倫理学の講義を受講した筈です。あの講義の中で、私は人生について、人間の生き方について、諸君達に語りました。それは、『如何に、生きるべきか』を自分自身に問いかけなさい、ということでした。そして、どのような生き方を選ぶとしても、力の限り、生きなさい、ということでした。そうすることによって、善くても悪くても、精一杯、生きたのだという思いが私達の心を支えるのです。今、学長を拝命し、私はこのことを深く思います。今回の私の新しい職務について、私は誠心誠意、力の限り盡す決意です。中日本短大は昭和四十二年開学の時から奉職してきた大学ですから、私には諸君と同じように深い愛着があります。中日本短大を守らなければならない、発展させなければならない、という気持で一杯です。どうか卒業生諸君、御支援をお願い致します。

さて、私は若い頃に、自分の一生がどうなってゆくのか、などということを考えたこともなかったし、確固とした方針を立てて歩んでた訳でもありません。ただ好きな道を歩んできただけです。しかも、その道たるや、余り格好のよいものではありません。ただただ、「この道一筋」でありました。

若い人達にとって、職業生活というものは期待と不安にみちた世界でありましょう。職業を選ぶということは大切なことでありますが、そのことで、その人の一生が決定されてしまうものではありません。立ちどまったり、迷ったりすることもありましょう。そうしたら、考えるのです。その結果、転職することになるかも知れません。それでよいと思います。三十代になった時、あるいは四十代のあるとき、その人が真剣に考えて選んだ道でありますから、後悔はありません。そして、ある年令になって、自分が歩いてきた道を振り返ったとき、たとえ、それがまがりくねった道であっても、白く光る「一筋の道」であることが、はっきりと見えてくるのであります。いずれにしても、自分が信じた道を、自分が選んだ道を、最後まで、力一杯、歩み続けることです。

恩師からのメッセージ

教授　大須賀和美

四十三年四月、第一期生二年次の教育から教壇に立ち今日まで、全卒業生が私の教室を通過していった。大分前の話しだが、広報の高校訪問の途中車の調子が悪くなり、あるデーラのサービス工場へ持ち込んだら、担当者が「あなたに逢った覚えがある、先生だと思うが高校か、自短大だったかなぁ」と、顔を覚えていてくれただけでもよい。

これも昔話し、長女が愛知県の自動車整備振興会の事務員をしていたとき、認定試験の合格証を持って検定の手続きに訪れた卒業生の一団が、あれが大須賀の娘だとヒソヒソ話しをしていたとの報告、「お父さん余り学生の評判よくないようだねと!!」二組合併の合同教室講義、雑談、居眠りの諸君を相手にどなってばかり、いやでも何とか二級に受かるよう教えなくてはと、評判の良いはずがない。相手が多過ぎて顔も名前も分らなく、また覚える気もないが、各学年余程悪かった二・三人だけは記憶にある。

自宅の近くに大きな玩具店を経営している卒業生がおり、子供や孫のおもちゃを買いに行ったが、値引はしてくれなんだ。彼はデーラのサービスへ就職していたが転向組、大分道が違うねと話したら、いや自短大やサービスでの経験が大変役立っています、今のおもちゃは電気式、機械式と高級・複雑になり、構造・機能を理解していないと修理もできませんとのこと。そのはずだ、軽い財布で孫をつれて行くと恥をかきそうになる。

自短大を卒業したから、二級整備士資格があるからとて自動車自体に固執することなく、機会をとらえて幅広く社会で活躍してもらいたい。

自動車界も大きく変化しており、二十数年前トヨタがカローラを、日産がサニーを発売したころ、大衆はスクータからやっと風雨のしのげる四輪車に手が届きかけたが、当時だれも自分の月給生活で新車が買えるとは思ってもいなかった。それがどうか、今日では日本国中自動車が氾濫しており、みなオーナ・ドライバーだ。これから三十年先はだれも見通せないが、世の中はちょっとしたはずみで大きく変化するもので、あの大国ソ連邦でも今日崩壊していったではないか。どのような変化にも対応できるように、日頃から自分の力を養っておき、チャンスをつかんで伸びていくことだ。

最近路上駐車に手を焼いた当局が車庫問題を再燃させてきた。自動車を持てば車庫の必要なことは、当然、法規の定めるところで戦前には車庫ごとに表札を掲げ、愛〇〇号、所有者〇〇〇と人間並みの扱いを受けていた。

しかし、戦争で日本の全都市が焼け野原となり、人間様の住いがままならぬとき、自動車の数も少なかったが、車庫問題は度外視されてきた。小生の自宅は三十数年前、田んぼの中の建売り住宅群の一つを入手したもので、永くこの辺り小生の自動車一つだったが、最近は玄関先まで他車に占領されるようになった。今更車庫法を持ち出しても大勢に抗することはできない。

急速に発達した日本の自動車産業は欧米と違い、建物・道路など周辺環境との調和がとられておらず、車庫問題・スクラップ問題等に多くの課題をかかえている。問題のあるところ必ず諸君の活躍の場があり、既存の組織の中で安住するのでなく、自分達の力で解決していくのだとの意気込みで当ってもらいたい。

視点を変えれば、日本車には安全性に欠ける大きな弱点がある。これはオイル・ショックに対する軽量化の結果で、日々の新聞紙上を見れば交通事故死の数でも伺える。高速性能を誇る車を作っておいて、警察は走るなといい、走れる道路もない。こんな大きな矛盾がどこにある。事故が起れば無謀運転だというが、どんな取扱いをしても安全なものを作るのがメーカの責任ではないか。衝突で火を吹いたら、ライターのような自動車を作ったと日本のメーカを裁判所へ訴えたアメリカの例など、今後の日本で考えるべきことでる。

機会があったら、いや機会を作って欧米の自動車先進国の交通環境を視察してもらいたい。旅行はできるだけ若い時ほど、その体験を実社会で生かす余裕があってよい。

とりとめのないことを書いたが、卒業生諸君に一筆、思いつくままに。

以上

教授　白井崇溥

「母校」は「母港」として

本誌「学友会会報」も早いもので、第十号発刊の運びとなりましたことを心よりお祝い申し上げます。

小生も開学以来、本学に奉職し二十余年が経過いたしましたが、この間、確実に一歩一歩足元を踏み固めながら、輝かしい歴史と伝統を築きあげて頂きました卒業生諸氏には、この場をおかりして、感謝の意を表す次第です。

さて、本学は昭和四十二年四月に開学いたしましたが、当時は、東大紛争が起こり、中国における天安門事件の如く、ヤングパワーが炸裂した頃であり、またボーリングがブームになったり、山本リンダが「ウララ、ウララ……」とミニスカートで歌っていた頃であったように記憶しております。その後、月面歩行、大阪万国博、よど号ハイジャック、オイルショックと続き、ペレストロイカ、ベルリンの壁の崩壊、東西ドイツの統一、湾岸戦争と時の流れを経て、今日に至ったのでありますが、こうし

てみると、現在の在学生がまだ生まれる前のことであり、随分遠くまで来てしまったような思いがいたします。

しかしながら、創立当初より、「技術者たる前に人間たれ」を建学の精神に掲げ、知識、技術、心の三位一体を重んじた教育の伝統と学風は、時の流れと、時代の移り変わりの中で、濾過されながらも受け継がれ、本学学風の核心となりました。学問研究と人格の陶冶を二本柱とする教育の理念は、二十余年を経過した今日におきましても、世の中に対応し得る理念と確信している次第です。いつの時代でも、大学は生気に満ち、その時代、その社会の文化・学術の核であらねばならないと心に留めておりますが、そんな時、フランスの哲学者アランのことば「遠くをみろ」が想い出されます。そういう視点からは、まだ開学以来二十余年という歳月は、あまり長くはないかもしれません。しかし、遠くを眺めること、未来を見つめ全体を考えることは不可決のように思われます。地平線のかなたには、無限に視野が展開し、そこに浮かぶ舟は、永遠につながるものを運んでくれるような気がいたします。

また一方、今日の科学や技術の発達にはすさまじいものがあり、教育は一歩も二歩も社会との間にズレを生じがちでありますが、常に遠くに視点をおいて総体を眺めながら進化していく必要があるのではないでしょうか。昭和・平成と時代が受け継がれてきた今までより、はるかに遠い道のりを考える時、中日本自動車短期大学の社会的役割も、時代と共に徐々にではありますが変わっていくものと思われます。大学の高度化、多様化、国際化という社会の要請を克服していく以外に生きていけないことを自覚し、本学の発展のための努力を惜しまないでいかなければなりません。二十一世紀に向かって、豊かな未来を築いていくためには、独創的な科学技術の開発と、それを担う創造性豊かな人材の育成が不可決なのであります。

発刊十周年記念増刊号という記念すべきこの節目に、卒業生諸氏の築かれた輝かしい歴史と伝統を守り「母校」は「母港」としての存在価値を維持していくことが、私共の任務だと考えております。

実習（自動車検査）の紹介

今回は、現在四号棟一階にて実習授業の展開が行なわれている自動車検査についての紹介をします。

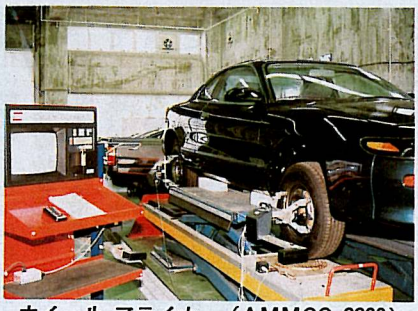
自動車検査は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと三つの分野に分かれて授業が展開されていますが、テスタ等を活用して検査基準に照らし適切な測定と判定が習得できるよう教育内容のカリキュラムが組まれています。

まず検査Ⅰでは、コンビネーションテスタ（ブレーキ・スピード複合テスタ）を活用して制動力、計器（速度計）の誤差、指針の振れ等の測定および検査を行ないます。光度、照射光線の振れについては、ヘッドライトテスタ（自動式）を用いて計測します。

コンビネーション テスタ

車輪の横すべり量はサイド・スリップ・テスタ（ウェバ型の定置式）を用いて検査をしますが、アライメントがサイドスリップに及ぼす影響についても学びます。

またコンピューター車検システム装置が設置してあり学生にとっても魅力あるものでしょう。


ホイール アライナー（AMMCO 3300）

検査Ⅱでは、タイヤチェンジャ・コンピューターホイールバランサー等を活用してタイヤ交換やホイールバランスの測定、修正を行ないます。また、実車を基に定期点検を行なって点検の結果を記録簿に記入して実際に行なえるように授業で学びます。

検査Ⅲでは、公害関係としてはCO・HCメータ、ボッシュ式ジーゼルスモークメータ、携帯用簡易騒音計により測定および検査を行ないます。重量関係では、定置式ロードメータ等により軸重を計量し計算により車両重量の算出を行なっています。また自動車の外部寸法の測定も行なっています。

フロントホイールアライメントの測定として気泡式アライメントテスタを用いて行なっていますがコンピュータ導入による四輪同時測定方式のホイールアライナー（AMMCO・3300）も設置されています。

自動車検査における実習内容は自動車整備業界へ就職する学生にとっては身近な存在であり、興味もあるのではないかと思われます。

4号館全体

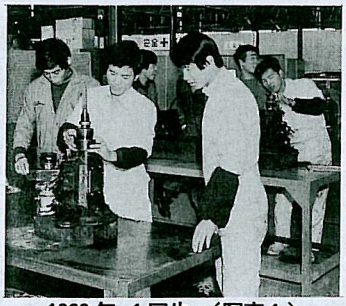
実習服の変貌

今回の会報発行は、第十号に当たり学友会も発足以来二十数年余り経ち、会員数は一万数千名となりました。これも一重に、これだけの方々が母校を巣立って行き現在社会で御活躍なさっているからです。

年号が昭和から平成に変わった様に母校でも、昔の面影すらなくなるぐらい変わってしまいました。その中でも、平成元年四月から、実習棟が一新し、実習授業が開始されました。また学生数が年々増加し、今年度の入学者数は八百人近くにも達し、キャンパス内は活気に満ち溢れている毎日です。

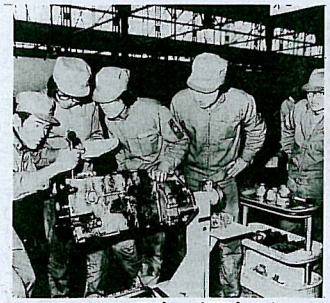
学園生活の思い出と言えば、数多く出てくると思いますが、やはり実習授業での仲間と一緒に勉強した日々もその思い出の中のひとつとして、残っているのではないでしょうか。そこで、思い出とは言い難いでしょうが、皆さんが学生時代実習授業でお世話になった実習服について、過去から現在に至るまでを振り返って見てどの様に変わっていったのかを見ていきたいと思います。

まず始めに、一回生の皆さんの作業服は、上下つながりのあるつなぎに身を包み、腕には手甲を付けて授業を受けていた様です。（写真１）



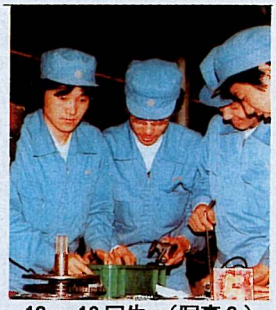
1969年　１回生　（写真１）

次に、二回生～十一回生までの作業服はつなぎから上下分割できるセパレートタイプとなり、色はグレーでスタンドカラーが特徴で左腕のペンさしの所で色分けをし、学年を見分けていました。（写真２）



２～11回生　（写真２）

次に、十二回生～十六回生までの作業服は、全体的にはほとんど変化ないんですが、特に襟が変った点です。これで作業服というイメージから少し離れたと思います。（写真３）



12～16回生　（写真３）

次に、十七回生～二十一回生までの作業服では、上下セパレート式なんですが、やはり十二回生～十六回生までの作業服と比べますと、作業しやすい素材でできた服になり、色も明るいブルーに近づけ、また、前から見ても学年を区別しやすいように縦ラインのデザインが考えられました。（写真４）

次に、二十二回生～二十三回生までの作業服では、まず色をブルーからベージュ色の作業服にして実習場を明るい場としました。また縦ラインから横幅の広い鮮かな色で学年を区別し、名前も前から見える様に左胸の上に刺しゅうしました。（写真５）

17～21回生　（写真４）

22～23回生　（写真５）

現　在　（写真６）

最後に、今現在の実習服は、さらに明るさを増し、デザイン的にも一新し、すばらしい作業服になっています。（写真６）

この様にして実習服も、実習場キャンパスと共に変わってきました。

昔の実習服は、まず汚れても良いためで、スタイルの面ではあまり重要視せず、ただ単に実習時に着用して来るものだということでした。最近の学校としての考え方は、安全対策面については昔も今も変わりませんが、実習場内を明るい場として活気づける。また、学校外部での着用も可能なデザインになり、学生たちの反響も良いみたいです。

OB近況

岐阜ダイハツ販売㈱
一九八三年三月卒
安田　廉さん

「就職先、決めました！」、当時、中日本の二年生夏、実習の先生に言うと、「そうか、良かったな。石の上にも三年というが、欲出して五年まじめにじっくりやって見ろ。きっといい世界が広がるから。」そう言われた日を思い出します。

あれから八年、現在私は、営業所の工場長という大役を任されて、忙がしい毎日を送っています。

「仕事は明るく楽しく！」をモットーに、頼もしいスタッフに囲まれて、日夜目標をクリアーすべく、熱く加速を続けています。

中日本の先輩がいない自社に、中日本出身の私が、初めての入社というプレッシャーが、当時あったかどうかは定かではありませんが、翌年からは、毎年後輩も続々と入社して来てくれて、今になって、プレッシャーのようなものを、感じることもなきにしもあらずです。

だが、とにかく今の自分にゴールはない。ひたすら自分にチューニングを加え、たとえスロットルはハーフにしても、コーナ手前でシフトダウンしても、それは、次の加速の為にあることを信じて毎日を送ろうと思っています。

日信工業株式会社
一九九一年三月卒
上野敦志さん

中日本自動車短大に進路を決めた時、正直いって不安だらけでした。私の場合、多分この学校に入った人のほとんどがそうかと思いますが、自動車、特にオートバイが大好きだったからです。とはいっても一生オートバイが好きだとも限らないし、自動車工業科という変わった科でもあったので本当に良かったのだろうかと思いました。

しかし今、私は自動車部品メーカーで働いています。結局オートバイ関係の仕事がしたくて、就職の先生方にもいろいろ面倒みてもらい、二輪、四輪のブレーキメーカーに就職しました。会社ではまだ六ヶ月間の実習ということでラインに入っています。キャリパーやマスターパワーなど学校での勉強のおかげでわかっている分、ラインでも楽しいです。しかしこの後、技術等にいけばもっと学校での勉強が役立つと思います。それまでの数ヶ月間、辛いことがあっても頑張っていきたいです。

㈱F・C・C
一九九一年三月卒
川崎義弘さん

十五歳の頃からバイク、車が好きで、好きなことで仕事が出来れば人生、楽しくなるだろうと考えて中日本に入学しました。中日本での二年間は色々なことを経験しました。約二週間に一度はあるレポート提出、朝までかかってよく書き上げました。座学でも好きな分野では九十分が短かく感じた時もありました。又、自動車研究会に入っていたので、工場見学に行ったり、メーカーの開発の人から開発コンセプト等の講演を聞けたので、車作りの実態を生で聞けて大きなプラスになりました。

そして今は、好きな車の仕事をしています。仕事となると趣味のようにただ好きなだけではいけない。大小の壁にぶちあたって少しずつ成長して経験を積んでいく自分を今感じています。現在、バイクのクラッチの性能耐久テストを主な仕事としてやっています。時には極限まで高性能、軽量化が図られたレーサーのクラッチを見て感激することもあります。開発の現場では他の人の熱気がビシビシ伝わってきます。自分も負けないように情熱を傾けていくつもりです。〝好きこそ物の上手なれ〟であると思います。

岐阜陸運支局
一九九一年三月卒
竹沢　健さん

「乗り物が好きだ。クルマが好きだ。」ただそれだけの理由で中日本に入学しました。入学する前はクルマのメカニズムに全く触れていなかったので、実習で見る物、手にする物は、何でも新鮮に見えて感激する事が多々ありました。

中日本には、就職に関しても大変お世話になりました。公務員試験を受ける際、わからないところを先生に相談しますと、わかりやすく丁寧に指導して下さりました。

現在、検査場で車検を受ける車や改造された車が、道路運送車両法の保安基準に適合しているか否かを検査する仕事をしています。ここでも中日本で学んだことが生かされます。車の各部品の構造や名称など知っておかないと、車に不具合がある場合、業者やユーザーに「どこがどのように悪いのかどのようにすれば良いか。」を説明指導することができません。不具合の見落しが事故につながることを考えると、非常に責任の重い仕事だと感じます。

まだ入って間もないために、周囲の皆さんに迷惑ばかりかけている毎日、早く一人前になりたいと思う今日この頃です。

在学生

今回は、二年生五名に登場してもらい、キャンパスライフ、将来の展望について語ってもらいました。

京都府西舞鶴高校出身
柴山芳美（二年）

岐阜へ来てもう二度目の夏を向かえている今、月日が経つのは早いなとしみじみ思っています。

この学校へ入る前、いろんな不安がありました。男の子ばかりの環境でうまくやっていけるのか、実習ではどうか？などなど。

しかし、今の状況はというと、

それらの不安があったことさえ忘れるほど、この学校にとけこんでいます。ただ一つ、女子学生が少ないため、女の子の友達が出来にくい、ということだけが悩みです。

もともと、バイクや車が好きでこの学校を決めたのですが、実習をしていくうちにその難しさを思い知らされて、好きなだけではやっていけないんだと思いました。でも、最低限自分の乗る車のメンテナンスは出来るし、車の中味を知るほど、それらが好きになっていくし、勉強していくうえではとても充実しています。目的があって勉強しているので、他の女子短大に行っている友だちと比べると、自分は恵まれているなどと思います。

卒業するまであと半年、しなければいけないことがたくさんありすぎて、どれから手をつけていこうか迷いますが、しっかり勉強して、国家二級整備士をとれるよう頑張ります。

鈴木節子（二年）
愛知県
小牧高校出身

私は、この学校に入る時、高校の三年の時のクラスの延長線だと思いました。私の通っていた高校は、半数以上が女子という高校でしたが、三年になってクラス編成によって、クラスに女子が四人という特異なクラスに居ました。ですから私は、この学校に入学した時、高校の延長の様なものでいいかなと思いました。でも、その考えは、入学して、一カ月位たってから、捨てた方がいいなと思いました。

クラスでは、女子の人数が、非常に少ないため、敬遠されてしまい、あまり友人ができませんでした。しかし一年の後期に部活に入り、そこで多くの友人ができました。最初は、部活の人達と仲が良くなり、そして、だんだんと慣れてくると、部活の人の友人とも、仲良くなり、今では、自分の居るクラス以外でも、多くの友人ができました。

松本哲也（二年）
兵庫県
神戸北高校出身

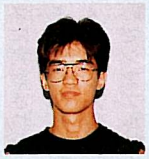
普通高校卒業なので知識が少なく、「授業について行けるだろうか」という不安がありましたが、中学の頃から車が好きで車の事について少しでも多く知ろうと思いこの学校を選びました。

一年半たった今では最初思っていた不安もなくなり、〝二級整備士の資格を取る〟という目標ができました。

昨年入学してすぐに吹奏楽に入部しました。部員が少ない為、曲がまともに出来ず、自分達でアレンジして練習したり学園祭前にはなかなか仕上がらず夜遅くまで練習したりして苦労の方が多かった様な気がしますが、苦労した分以上に良い結果が返ってきたので今では良い思い出となっています。

それから、この部活で自分の意見だけでなく、全く違った意見も聞いて話し合い物事を解決しなければいけないという事を学びました。

学生生活も残り少ないのですが楽しく遊び目標に向けての勉強をしていきたいと思います。



鈴木康之（二年）
千葉県
茂原工業高校出身

私は、工業高校機械科の出身なので、機械に関しては多少の知識があったので幾分、授業や実習において楽にこなせるものと考えていましたが、それは甘い考えでした。

頭の中では解っていても、相手に教えられなければ、理解させられなければならないと気付いたからです。

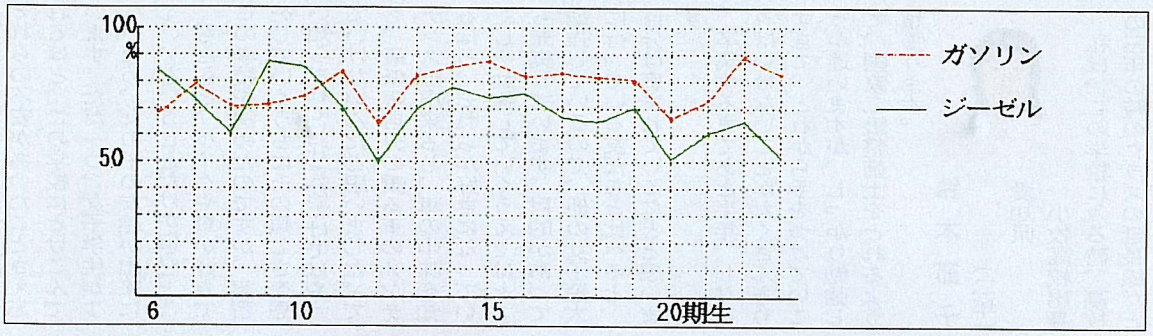
それ以後は気持ちを変え、一からやり直し、先生方の話を眠い目に気合を入れながら聞き入り多少は、自分で理解できましたが、まだまだ思うようには進みません。

車業界は、絶えず進歩しています。

最近は、自己理解の道は学生生活が終っても続くものだなと考えるようになってきて、約一万四千人おられるOBの方々も絶えず、前進を続けられているのかと思うと自分も身が引きしめられ、残りの約半年を有意義にかつ、大切に過ごしてゆきたいと思います。

峯琢哉（二年）
愛知県
名電高校出身

私がこの学校を選んだ動機は、自動車業界ならば好景気が三年から五年の周期なのと、今の世界では、自動車は切っても切れないものと思っていましたので、この中日本自動車短期大学に決めました。ですから、最初の方の実習はとても大変でした。工具の名前すら知りませんでしたし、どれがシリンダで、どれがピストンかも知りませんでしたが、一カ月・二カ月と過ぎて行くうちに自然に覚えていました。自動車のことも理解し始めると授業も楽しくなってきました。しかし学生生活で楽しいことといいますと、夜が最高の遊び時間でした。例えば、友達同士で京都の山中へドライブに行ったり、静岡へ行ったり、それからカラオケにも行ったりして楽しみました。そして坂祝町の唯一の遊びのパチンコに行って、今日はいくら勝ったとか、負けたなどと、どうのこうのと学生時代にしかできないバカなことばかりしています。でも、こういうようなバカばかりしていた学生時代が何年後か何十年後には良い思い出となってくれると良いと思っています。



認定試験合格率

技術研修課

毎年、学生はこの認定試験に向けて最後まで一生懸命努力します。しかしその努力がすべてむくわれるとは限りません。目的意識を持って普段からの努力の積み重ねが実を結ぶものです。

今年の認定試験合格率は、ジーゼルが平均を若干下回ったもののガソリンは平均を維持しました。例年の合格率をグラフに示します。

今後も中日本自動車短期大学の卒業生として、また社会の一員として精一杯頑張ってください。

シンボルマーク出来上がる

かねてより懸案であった学友会のシンボルマークが昨年の総会で決定されました。

検討の段階からそれぞれの想いがあり、議論百出という状態でスタートしました。結局、専門家に任せるということで、名古屋芸術大学の楠原教授に依頼することになりました。

およそ三ヶ月後、五点の作品が提案され、その中からこのマークが選ばれた訳です。

NAKANIHONの「N」をベースに考案されたものですが、輪だちや道路など自動車に関連するイメージも表現されており、それでいてシンプルな作品です。

現段階ではシンボルカラーが決定されておりませんので、今回は図案の紹介だけですが、十一月頃には決定される運びです。

今後さまざまな形で、このシンボルマークが皆様の目に触れることと思いますが、その節は親しみをこめてご覧下さい。きっと気に入っていただけることと思います。

NAKANIHON AUTOMOTIVE COLLEGE

◇文化講演会◇

昨年十一月十四日に学友会として初めて立松和平氏（作家）を迎え、美濃加茂市文化会館で講演会を開催しました。

聴衆者の反応は大変良く、八〇%を越える方が「たいへん満足した」と答えられました。

やわらかな物腰、独特の語り口で自然のすばらしさをしみじみ訴えられる姿、そして私達人間が社会・経済の発展とともに犯してきた自然破壊への警鐘など、今なお鮮明に脳裏に残っています。

今年度も後述のように森下郁子女氏を招いて文化講演会を行う予定です。このような活動を通じて、大学と地域社会がより親密になり、開かれた大学として地域に根づいていけば、私達としてもこの上ない喜びとするところであります。

会員の皆様もぜひご来場下さい。

（整理券は事務局へおたずね下さい）

第二回文化講演会

日　時　平成三年十月二十九日㈫
十九時より

場　所　美濃加茂市文化会館

講演者　森下郁子女氏

演　題　仮題「川」

〈プロフィール〉

一九五九年奈良女子大学理学部動物学科卒。現在、（社）淡水生物研究所長。

主な著書

「川の健康診断」「生物からみた日本の河川」「河口の生態学」「アマゾン川紀行」など多数。

創設者　神野浅義氏

ご逝去のお知らせ

本学の創設者である神野浅義氏が、かねて病気療養中のところ九月二十一日午後十時十三分　八十歳のご高齢をもって天寿を全うされました。

ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、皆様にご報告致します。

尚、告別式（合同葬）は、左記のとおり営まれます。

日時　十月二十九日㈫　午後二時～

式場　愛知県津島　勤労福祉会館

平成3年度事業計画

事業担当　大脇澄男

◎　**総会の開催**

昨年から移動総会の試みをしていますが、今年度は名古屋市内で実施することになりました。位置付けは移動総会です。

◎　**会報の発行**

本年度は新生学友会発足10周年に当たります。会報もそれにあわせて10周年特集号ということになります。

◎　**講演会の開催**

昨年度から、地域社会の人々に大学のことをもっと知ってもらう目的で、講演会等を実施することとなりましたが、本年度は「淡水生物研究所」の所長森下郁子氏を内定しています。

◎　**愛知県支部の設立**

総会の開催にあわせて、懸案であった、愛知支部の設立大会を行います。愛知県出身者は勿論、多数の会員の参加とご協力をお願いいたします。

◎　**キャンパスグッズの見本作成**

ロゴマークが制定されたので、ロゴ入りのオリジナル製品を何点か、見本製作する。見本が出来上がり次第公開しますのでその時は、ご意見をお寄せ下さい。

◎　**25周年記念事業の計画立案と準備**

来年度は母校設立25周年に当たる、記念すべき年である。学友会の総力を結集して一大事業を行いたい。

◎　**大学当局との懇談会の実施**

他校が21世紀を見据えて、積極的な設備投資とカリキュラムの創意・工夫とによって教育機関としての独自性を確立しつつあるとき、ひとり母校は、21世紀への展望を示せないまま、時代の流れの激しさの中で翻ろうされている観がある。懇談会を通してOB諸兄の生の声を当局にぶつけていくことは双方にとって有益であるばかりか、必要である。

◎　**準会員との懇談会の開催**

準会員との親睦をはかり、大学生活の活性化を側面から援助する。

◎　**その他**

定型化・形式化された事業については従来の方式で処理するものとする。

会則の変更について

昨年十月二十八日に開催された代議員総会において、会則の変更が提案され、賛成多数で承認されました。会則第二十六条（会員への通知）に基づき本会報にて告示します。

〈現行〉

第十一条（役員等の任期）

本会の役員及び代議員の任期は、二年とする。ただし再選をさまたげない。

〈改正〉

代議員の任期は、二年とする。ただし、再選をさまたげない。

二、会長及び副会長の任期は二年とし、連続四年までとする。

〈変更箇所〉

一、一項の「本会の役員及び」を削除した。

二、第十一条の二項として、会長、副会長の任期を明確にした。

以上。

尚、現在の会則は、創立期より変更されていないので、一部現状にそぐわない点があります。必要に応じて順次改正していきたいと思います。

〝二十周年記念会員名簿〟のお知らせ

本学卒業生も、はや二十三期生を社会に送り出し車社会においては確固たる地位を築いています。

我々学友会会員も一万数千名に達しました。そこで一昨年一期生から二十期生までの〝二十周年記念会員名簿〟を作成し販売しています。残り少なくなってまいりましたが、購入希望者は、短大学友会事務局にて申し込んで下さい。

又この名簿は皆さんに発送する会報の住所をもとに整理したものです。今後も住所、氏名、勤務先等変更がありましたら同封のハガキにてご連絡願います。尚住所の右下の数字が個人の整理番号です。

（学友会名簿委員）

代議員総会のお知らせ

昨年、平成二年度の事業計画の一つとして、支部の活性化ということから代議員総会を全国各地で行うという移動総会案が立案されもっとも支部活動の著しい岡山県支部にお願いし開催する運びとなりました。当日は、本学からも多数の恩師の先生方をはじめ全国各地から代議員にもお集まり頂き盛大に開催する事が出来たことを、関係者一同感謝致しております。

さて、本年度も代議員総会を名古屋にて下記のごとく行います。

代議員各位は必ずご出席下さいますようお願い致します。

又、毎年一般会員のオブザーバー参加も行われています。代議員総会終了後には、当日発足予定の愛知県支部会員と共に立食会を催しますので、本年も多数のご参加を期待しています。

記

名称　中日本自動車短期大学　学友会

平成三年度代議員総会

日時　平成三年十一月十七(日)

午前十時～十一時三十分

会場　ホテル　キャッスルプラザ

TEL（〇五二）五八二－二一二一(代)

議題

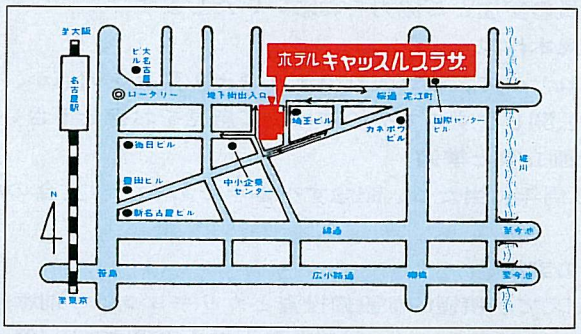
一、平成二年度事業報告

一、会計報告

一、平成三年度事業計画

一、その他

以上



愛知県支部設立のお知らせ!!

長い間、懸案になっておりました学友会愛知県支部の設立が、おかげを持ちまして左記日程により実現の運びとなりました。

今年こそ、今年こそと毎年思いながら、なかなか実行出来ず愛知県〇Bの諸兄に何かと御迷惑をおかけしました。学友会前会長や、学校関係者、他県代議員の皆様よりのアドバイス、ご意見は大変有難く、準備委員といたしまして大変感謝致しております。

尚、今後の支部活動につきましてまだまだ協力していただける人員が不足しております。是非我々と共に活動に参加していただける人を募っておりますので連絡下さるか、当日会場へお越し下さる様お願い申し上げます。

記

日時　十一月十七日（日）

午後十二時～十五時

会場　名古屋市中村区名駅四丁目

ホテルキャッスルプラザ

☎（〇五二）五八二－二一二一

編集後記

日進月歩で進歩する科学技術。産業界ではロボットの導入による無人化が図られ、電子制御による自動生産システムが活躍。日常生活にも外出先から湯沸かしや施錠のできるホームオートメーション、自動録画ビデオといった電子制御による家電製品があふれています。十年前には夢であったことが科学技術の進歩によって成し遂げられているのです。自動車における電子制御計測装置や電子制御燃料噴射装置などはその最たるものといえるでしょう。

本学では、時代のニーズに対応できる自動車エンジニア・メカニックの育成を目指した教育が実践されています。

おかげ様で、学友会会報も、十周年目を迎える運びとなり第十号を発刊することが出来ました。

発刊にあたりまして、御協力いただいた皆様方に心より厚く御礼を申し上げると共に母校の発展と学友会会員の皆様のご活躍を祈念して編集後記とします。